



CSV戦略 **2** 生物多様性の保全

事業の影響力を考慮し、持続可能な自然資本の利用によって生態系ネットワークを守る

重要なステークホルダー：サプライヤー（植木生産者・造園業者、木質建材メーカー）、お客様

背景

住宅の植栽が都市生態系に影響を及ぼす

都市化の進行によって緑地が減少してきた中、全国各地で緑化の取り組みが広がっています。都市域における効果的な植栽は生態系の保全につながるだけでなく、人々の憩いの空間を創出し地域を活性化する、雨水を貯留して都市型水害を抑えるなど、多面的な機能を持ちます。こうした緑の多様な働きを、さまざまな社会課題解決のための基盤として活用する「グリーン・インフラストラクチャー」の考え方が今、注目を集めています。

住まいづくりにおいても、植栽は不可欠な要素です。毎年多くの樹木が、全国各地で庭木として植えられています。しかし、見栄えや管理の容易さから選ばれることの多い園芸種や外来種の樹木は、地域の鳥や昆虫にとって活用可能性の高いものばかりではなく、日本の気候風土に適さず、病害虫への耐性が低いものも少なくありません。地域の生態系を守っていくには、植栽にも生態系に配慮した樹種の選定が必要です。

木材調達での合法性トレーサビリティ確保の重要性

木材は、構造材、内・外装など住宅を支える重要な素材で、積水ハウスでも毎年30万m³以上の木材を使用しています。しかし、生物由来の原料である木材は、住宅に使われる数万点の部材の中でも、流通経路の複雑さに鑑みてトレーサビリティの確保が最も必要な材料と認識しています。

特に重要なのは、使用する木材が「違法伐採」によるものでないことを、しっかりと確認することです。近年、海外では旺盛な需要に対応するために許容量を超えた伐採や、森林保護地域などの禁止地域での伐採、盗伐・密輸などの違法伐採と流通が大きな問題になっています。こうした違法伐採は、生態系の大規模破壊につながり、温暖化が進行するなど森林の有する多面にわたる環境保全機能に影響を及ぼすだけでなく、地元住民の生活を破壊し、木材市場と森林資源の評価をゆがめ、持続可能な森林経営を阻害するなど、社会的な面でも多くの悪影響をもたらしています。

アプローチ

目指す姿

サプライチェーンをけん引して、生態系の保全を社会に定着・普及

日本のプレハブ住宅メーカー最多の住宅を供給している積水ハウスは、毎年約100万本に及ぶ樹木を植栽している日本最大規模の造園業者でもあります。当社の樹種の選択が市場トレンドに与える影響は決して小さくありません。こうした観点から当社では、地域の生態系の保全に貢献する植栽の推進と、世界の生物多様性の保全につながる持続可能な木材調達に注力しています。

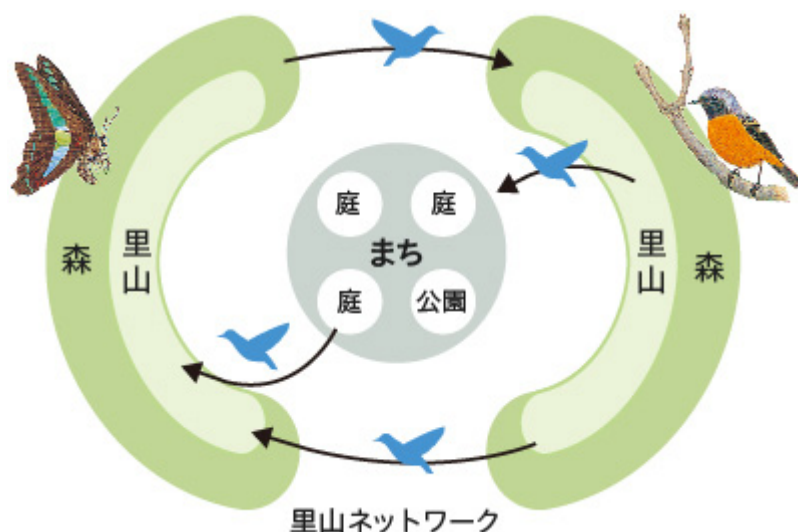
植栽や木材といった自然資本や生態系サービスは、その成熟や回復に長い時間を要します。また、こうした取り組みは一社で完結するものではありません。当社は長期的なシナリオのもとでサプライヤーとともに地道な活動を継続し、豊かで心地よい暮らしの提供を通してお客様に価値を理解していただくことで、これらを社会のトレンドとして広めていくことを目指しています。

活動方針

①「5本の樹」計画による、地域の生態系に配慮した在来種の推進

園芸種・外来種のみを多用せず、生態系に配慮した、地域の生物にとって活用可能性の高い「在来種」を積極的に提案する造園緑化事業を「5本の樹」計画と名付け、2001年から推進してきました。

計画の実施に当たっては地域の植木生産者・造園業者のネットワークと連携し、従来は市場流通の少なかった在来種の安定的な供給体制を確保。生き物と共生する暮らしの豊かさと、環境保全におけるその意義を、生活者に提案していきます。



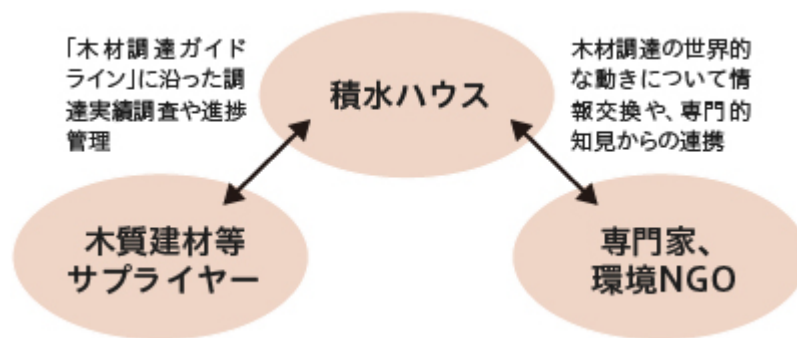
②合法で持続可能な木材「フェアウッド」の利用促進

持続可能な木材利用を可能にするため、伐採地の森林環境や地域社会に配慮した木材・木材製品「フェアウッド※」の調達に取り組んでいます。

フェアウッド調達にあたっては、合法性はもちろん伐採地の生態系や住民の暮らしまで視野に入れた「木材調達ガイドライン」10の指針を設定。約50社の木質建材サプライヤーに「調達実績調査」を毎年実施し、調達木材の生産地や属性、合法性などを報告してもらい、ガイドラインに沿って数値化することで進捗を管理しています。この取り組みを通してサプライヤー側でも調

達ルートへの意識を高め、上流の商社等に対する啓発が進むことで「フェアウッド」の広がりを図っています。

※ 一般財団法人地球・人間環境フォーラムと国際環境NGO FoE Japanが提唱しています。



活動が社会に及ぼす影響

「5本の樹」計画の推進により、豊かな緑に包まれた快適な暮らしをお客様に提案することで、居住価値の高い住まいを実現できます。また、緑の成長が経年的にもたらす建物の風格が、資産価値向上に有用であるとの認識が強まり、賃貸住宅の共有部分などでも緑化が進み、豊かな都市空間が広がります。

また、木材調達の分野では、当社のガイドラインへの対応過程で、サプライヤーが各社の調達プロセスへの関心を高めて各サプライヤー自身の木材についてのトレーサビリティ情報の精度が上がっています。これにより、高品質の「フェアウッド」の安定的な市場が拡大することで、持続可能な木材の普及につなげることができます。

リスクマネジメント

リスク① 「5本の樹」と同様の提案が業界に広がることで、当社の提案の価値が相対的に低下

対応① 植木生産者ネットワークとの長年の連携を生かし、市場ニーズに沿った樹種の提案を積極的に進めるとともに、設計の提案力向上や施工体制の強化によって、より満足度の高いトータルなエクステリアデザインで差別化を図ります。これにより新しい価値を提案し続けることで、生態系に配慮した緑化の市場をさらにけん引します。

リスク② 国際的な規制強化により伐採・輸出・流通が制約され、木材の安定調達が困難

対応② 伐採地の動向等の最新情報は現地環境NGOが把握していることが多いため、国際環境NGOとのネットワークで情報を捕捉し、その情報を早期に木質建材サプライヤーと共有することで当社に対する優先的な木材の供給体制の見直しを準備してもらうことができます。



CSV戦略 **2** 生物多様性の保全

事業の影響力を考慮し、持続可能な自然資本の利用によって生態系ネットワークを守る

重要なステークホルダー: サプライヤー(植木生産者・造園業者、木質建材メーカー)、お客様

進捗状況

①「5本の樹」計画による、地域の生態系に配慮した在来種の推進

活動報告

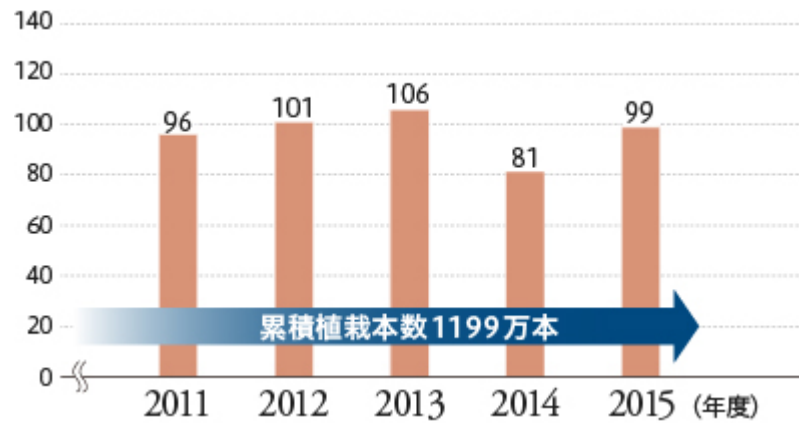
「5本の樹」計画を継続的に推進

「5本の樹」計画に基づいて、地域の生態系に配慮した植樹を進めています。2015年度も99万本の樹木を全国の新築住宅や賃貸住宅の庭に植樹し、2001年の取り組み開始時からの累積植栽本数は1199万本となりました。

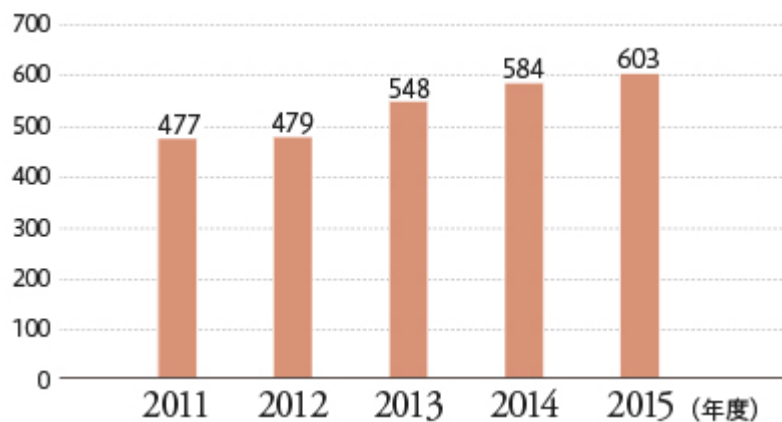
主要指標の実績(KPI)

指標	単位	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	定義
年間植栽本数	万本	96	101	106	81	99	当社造園緑化における年間植栽本数

■ 年間植栽本数(万本)



■ エクステリア事業の売上高(億円)



評価

戸建住宅の着工減少により植栽本数は減少傾向にあります。しかし、これまで「緑化」がイニシャルコストのアップや管理コストへのマイナスと受け止められがちだった賃貸住宅やマンションにおいても、植栽による快適性や経年美化、差異化への貢献が理解され、植栽の増加や緑化提案の質の向上が進んでいます。

これに伴って、緑化植栽を含むエクステリア事業の売り上げは、年間600億円を上回りました。

今後の取り組み

断熱性の高いサッシの普及により開口部がさらに大きくなったことで、窓から見える庭の景色は建物自体の付加価値となり、住まい手の快適性への影響も大きくなりつつあります。そこで、緑化が住まい手にもたらす快適さを、庭のチョウ類との関係でも調査することとし、日本ではあまり例のない、個人の庭レベルでの大規模なチョウ類の調査を行い、生態系保全とお客様の快適性両立の可視化を進めていきます。

VOICE

特定非営利活動法人 日本チョウ類保全協会
事務局長 中村 康弘氏

庭や公園に茂る緑の木々は、さまざまな生きものをつながりを持っています。庭で見られるチョウの種類が、平均で20種以上にもなることから、庭の緑は、野生生物にとって重要な役割を果たしていることが分かります。

「5本の樹」計画の取り組みが広がっていけば、庭と庭をつなぎながら、都市から近郊まで続く「緑のネットワーク」が生まれます。つながりが広がれば、さらに多くの生きものが安定して生存できることから、こうしたネットワークは生物多様性の保全の上で、重要な役割を果たします。

生物多様性の回復への取り組みが、庭に在来の植物を植えるという無理のない形で、かつ大規模に実現されていることは、人々の自然環境への意識や関心を高めることにもつながっており、今後、この取り組みがさらに充実することを期待します。



積水ハウスと共同で「お庭のチョウ類調査」
を実施しています。

<https://butterfly-garden.jp/sekisuihouse/>



活動報告

「5本の樹」計画

「5本の樹」計画とは

「5本の樹」計画とは、地域の在来樹種を庭づくりに生かす積水ハウス独自の生態系に配慮した庭づくり・まちづくりの提案です。2015年度の樹木の植栽実績は99万本となり、2001年の事業開始以降の植栽本数は累計1199万本となりました。

日本の国土の約4割を占める「里山」は、絶滅危惧種を含めた多種多様な生き物をそこで養うばかりでなく、野生動物の移動のための回廊の役目を果たし、生態系ネットワークを形成することによって、生物多様性の保全に重要な役割を担ってきました。ここでは住まいも人の暮らしも、生態系の一員でした。しかし近年では、急速な都市開発、化石燃料に頼った住まいづくり・ライフスタイルの変化などに伴い、都市近郊での「里山」が激減し、人間から「里山」へのアクションが減った結果、本来「里山」の持っていた生物多様性が損なわれつつあります。

当社は、数多くの住宅を供給するハウスメーカーの責任として、住宅を通じた自然環境の保全に向け、『里山本来の姿』を手本に2001年から生物多様性に配慮した造園緑化事業「5本の樹」計画を進めています。住まいの庭に小さな「里山」をつくることで、地域の自然とつなぎ、失われつつある生態系ネットワークを維持・復活させようというのが狙いの一つです。

「5本の樹」計画には「3本は鳥のために、2本は蝶のために、日本の在来樹種を」との思いが込められています。

日本各地の気候風土に合った在来種の樹木をこだわって植栽することで、生き物など身近な自然と共生し、時とともに愛着が深まっていく庭づくりを目指しています。

2015年度の樹木の植栽実績は99万本で、2001年の事業開始以降の植栽本数は累計1199万本となりました。2012年からの2年間は100万本を超える樹木を植栽してきましたが、2014年は戸建住宅受注減の影響から、減少しました。2015年度はシャーマンガーデンズの実績増加も寄与し、100万本に迫る本数となりました。

都市に、小規模でも庭や街路を設けると、野鳥や蝶などの生き物が訪れる場所になります。このような空間を少しでも多く設ければ、それらの生き物が移動する回廊となり、ネットワークを形成して生態系を保全し、生物多様性を豊かにします。こうした空間は、生き物にとって訪れやすい(利用しやすい)場所になるだけでなく、同時に住まい手も自然の豊かさを楽しむことができますようになります。



「5本の樹」による生態系ネットワーク

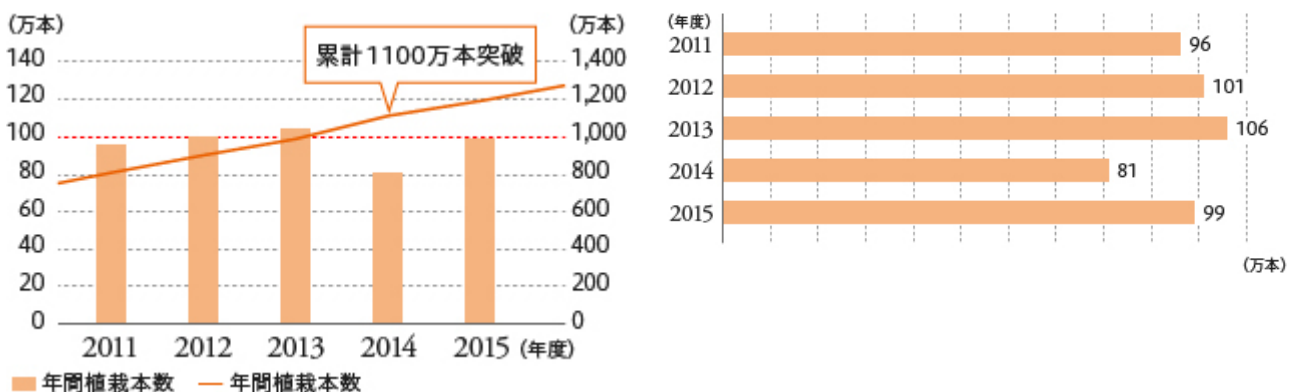
「5本の樹」計画の植栽例



緑量のバランスを考慮した「5本の樹」計画の庭は、生き物が生息しやすい環境をつくるだけでなく、住まい手にも種々のメリットをもたらします。例えば、野鳥のえさ場となる実のなる落葉広葉樹は夏には緑陰によって強い陽射しを遮るだけでなく葉の蒸散作用で冷気を生み出し、冬は葉を落とした枝の間から暖かな日差しを住まいの中に取り入れて冷暖房エネルギーの削減に貢献してくれます。また、常緑樹は一年中緑の風景を保ち小さな野鳥たちが猛禽類などから身を隠す避難場所になりますが、そこに住まう人にとっては通りからの目隠しとなってくれます。また、最近では樹木や草花の癒しの効果も注目されるようになり、「5本の樹」計画の一つの成果として現れ始めています。

豊かに整備された緑化は、時間の経過とともに成長して住環境への愛着を育み、住まいやまちの資産価値を高め、「経年美化」を実現する重要な要素となっています。

年間植栽実績の推移



活動報告

「5本の樹」計画

生物多様性活動に関する民間団体への参画

「企業と生物多様性イニシアティブ」に積水ハウスは創設メンバーとして関与し、生物多様性に関する取り組みの重要性を認識し、事業へ反映してきました。そのほか日本経団連等「生物多様性民間参画イニシアティブ」「生物多様性民間参画パートナーシップ」へも参画しています。

「企業と生物多様性イニシアティブ(JBIB※)」への参画

生物多様性条約(CBD)では、生物多様性の保全と持続可能な利用の実現等、条約目的の実現について、民間部門の重要性が強調されています。「JBIB」は、2008年4月1日に、当社のほか、国内で生物多様性の保全および持続可能な利用に積極的に取り組む企業が集い、設立され、2012年6月には一般社団法人となりました。当社は創設メンバーとしてその創設に関与し、早くから生物多様性に関する取り組みの重要性を認識してきました。参加企業は2015年6月時点で正会員企業37社、ネットワーク会員企業12社にのぼり、企業が主体となって連携した活動が行われています。

生物多様性の保全に関する共同研究を実施し、その成果をもとに他の企業やステークホルダーとの対話を図ることで、生物多様性の保全に貢献するWG活動を展開しています。

2015年度は、「持続的土地利用ワーキンググループ」に参加し、都市を活動基盤とし活動している企業が水・緑・生物多様性等に配慮した持続可能な土地利用に努めることの重要性認識に基づき、WG参加18社で「サステナブルな社会をめざす自然共生 街づくり読本」を作成しました。

※ JBIB (Japan Business Initiative for Biodiversity)



【関連項目】

> [「企業と生物多様性イニシアティブ\(JBIB\)」ホームページ](#) 

生物多様性条約第9回締約国会議(COP9)では、開催国ドイツ政府の主導で「ビジネスと生物多様性イニシアティブ(通称:B&Bイニシアティブ)」が提唱され、当社は日本企業9社のうち1社として、2008年に参画に署名しました。

その後、幅広い業種でさまざまな規模の事業者が生物多様性に関する取り組みに参画し、その裾野を拡大していくことが必要として、2010年5月25日、生物多様性の保全および持続可能な利用等、条約の実施に関する民間の参画を推進するプログラム「生物多様性民間参画イニシアティブ」が、10月にはその活動主体となる「生物多様性民間参画パートナーシップ」が設立されました。

これは、日本経済団体連合会、日本商工会議所および経済同友会等、経済界を中心とした自発的なプログラムとして、国際自然保護連合日本プロジェクトオフィス、農林水産省、経済産業省および環境省と協力されたもので、パートナーシップ参加事業者会員は2016年4月時点で401事業者、19経済団体、NGO・研究者会員32、公会員15に及び、当社もこれに加盟しています。

活動報告

「5本の樹」計画

緑豊かな賃貸住宅「シャームゾン ガーデنز」

「5本の樹」計画の考え方を賃貸住宅のエクステリア提案でも生かしています。「シャームゾン ガーデنز」と名付けている賃貸住宅では、「5つの環境プレミアム」を新たな指標とし、建物とともに敷地、周辺環境も含め良好な住環境を創造しています。

「5本の樹」計画の考え方を生かし 賃貸住宅の質を向上

積水ハウスは、「5本の樹」計画の考え方を、賃貸住宅のエクステリア提案でも生かしています。特に、「シャームゾン ガーデنز」と名付けている賃貸住宅では、植栽計画は重要な意味を持ちます。



Sharmaison Gardens

当社は、まちや自然、暮らす人の観点から敷地環境を高める「5つの環境プレミアム」(①街並みとの調和 ②自然環境の保存と再生 ③環境負荷への配慮 ④快適性を高める設計 ⑤安心・安全をもたらす設計)を新たな指標とし、それぞれの項目に当社独自の厳しい評価基準を設け、数字で見える化し建物とともに敷地、周辺環境も含め良好な住環境を創造しています。このような優良な環境の物件は、入居者にとっての住環境を向上させるばかりでなく、オーナー様にとっても入居率や賃料に好影響を与え、資産価値を向上させることになり、将来まで選ばれ続ける賃貸住宅になります。



周辺環境との調和を図り、既存樹木はできるだけ生かし「経年美化」を現実とする

「シャームゾン」の計画地でも周辺環境との調和がまちなみの美しさに影響します。敷地全体で建物と調和する緑豊かな共有空間をデザインするとともに、歴史ある既存樹木や、「経年美化」を実現する素材の利用を推進するなど、その土地と周辺環境の魅力を最大限に引き出す外構とし、建物と相まって魅力を高めることで、地域に溶け込む「まちの財産」をつくります。

「グリーンガーデン松桐」がたたずむ場所は、70年前に播いた種や苗が育ち、歳月を経て広大な樹林となった土地でした。配棟計画では、既存の樹木達を最大限に生かし、枝や根の伸びている範囲を考慮に入れながら建物配置を決定しています。

エントランスや中庭を含めたこの集合住宅は、クスノキを中心とした圧倒的な既存樹の存在を邪魔することなくさらに引き立て、悠然と育った樹木と寄り添い……

始めからそこにあったかのような景観を作りました。そしてまた、新たな時間を刻み始めています。



保存樹林を生かし計画された、緑あふれるシャーメゾン「グリーンガーデン松桐」(大阪市)

緑化率を高め、環境価値の向上と緑を通じたコミュニティを育てる

入居者にとっても、緑豊かな環境は心地よく暮らすための大切な要素の一つです。入居者同士の自然な交流をはぐくむことができる緑に配慮し、緑化率10%以上を目標に、経年美化につながる緑の環境づくりを提案しています。近隣の人々とのふれあいを生むようなコモンスペースなどをそれぞれの敷地に合わせて計画。コミュニティづくりにも役立てています。また、建物は住棟間の距離や窓の配置などに工夫し、樹木も生かして外部からの視線を自然に遮ることができるよう、プライバシーにも配慮します。植栽する樹木は「5本の樹」を中心とし、生物多様性に配慮した計画を心がけています。



コミュニティを育む緑豊かな「コモンスペース」

「プラチナ ガーデنز」を新たに創設

賃貸住宅を対象としていた「シャーメゾン ガーデنز」に、サービス付き高齢者向け賃貸住宅・有料老人ホーム・グループホームなどの高齢者向けプラチナ物件を加え、「プラチナ ガーデنز」として展開を始めました。シャーメゾン ガーデنزの評価基準を踏襲しつつ、④快適性を高める設計 ⑤安全・安心をもたらす設計 の項目にプラチナ事業ならではの基準として、高齢者や運営スタッフの視点を盛り込んでいます。

2015年度は54棟2015戸を「プラチナ ガーデنز」として認定しています。

活動報告

「5本の樹」計画

分譲マンションにおける緑化の推進

「5本の樹」計画とともに、植栽の豊かさを示す緑被率の高さは積水ハウスの分譲マンション「グランドメゾン」の大きな特長です。2015年度に竣工した物件の緑被率は平均31.8%で、前年度より大幅に増加しました。

従来のみちづくりでは、マンションは地の利と利便性が最大のポイントで、植栽などの緑化はむしろ計画コストや管理費に影響を与えるものとして敬遠され、エントランス部などに外来種の常緑樹中心に最低限の植栽が施工されることも少なくありませんでした。

当社では、2001年に戸建住宅や大規模分譲地から「5本の樹」計画に基づく緑化を開始しました。緑化がまちと建物の価値を高め、住まい手にとっても快適性を高め魅力をアップする重要な要素であることを全社で共有し、分譲マンション事業においても緑化を推進し、敷地面積に対する植栽面積の割合を示す緑被率を20%以上とすることを目標として事業を推進しています。

共同住宅における外構空間の豊かな緑は、住民の心を癒すとともに、住民同士のふれあいの場としても、その付加価値を高める重要な意味を持つと考え、この空間づくりに注力しています。

これらによる取り組みの結果、緑被率の高さは「5本の樹」計画とともに当社の分譲マンション「グランドメゾン」の大きな特長として評価されています。2015年度竣工12棟の緑被率は、平均31.8%(総敷地面積18193m²、総緑地面積5787m²)となり、前年より大幅に増加(14ポイント増)しました。

グランドメゾン白金の杜 ザ・タワー(東京都港区)

「グランドメゾン白金の杜 ザ・タワー」は、東京都港区白金に立地する30階建のタワーマンションです(2015年7月入居開始。全334戸)。

都心にありながら多くの緑が残され、洗練と気品に満ちたまちなみとして有名な白金のシンボルであるプラチナ通り沿いに面しており、さらに南側には通り越しに広大な国立科学博物館附属の庭園の緑が広がる周辺環境。グランドメゾン「白金の杜」では、緑の多い白金のまちなみを意識し、「都心のアーバンリゾート」をイメージしました。「5本の樹」計画に基づく在来種を中心とした豊かな植栽計画や自然石による石積によって、歳月を重ねていくごとに美しくなる「経年美化」のみちづくりに努め、居住者にとって心地の良い環境を創りだしています。

メインゲート前にはイロハモミジをシンボルに、両サイドには10~12m高さのシラカシやケヤキを配置。秋には、プラチナ通りのイチョウと相まって、まちの資産となる美しい風景を演出しています。また、グランドホールからつながるプライベートフォレストは、緩やかな起伏を設け、季節感を感じられるように、四季折々に咲く花を足元に配置。高い樹木に囲まれた中央部は、アキニレの高木を中心に芝張りになっており、お住まいの方々が自由にお使いになれる憩いの場となります。

開発前の森の風景の記憶を伝えるべく本来あった緑の丘の復元を目指し、隣地境界際にある既存樹を保存にも努め、これらの取り組みにより、起伏に富んだ敷地の4割以上(緑被率43%)に約2万本の樹木(低木を含む)を配置しています。「免震・制震構造」の採用、長期優良住宅認定と合わせ、居住者が末長く快適に過ごすことのできる環境を提供しています。



高木のシンボルツリーを配置した風格のあるエントランス



アキニレの高木を中心としたプライベートフォレスト



豊かな緑は入居者の癒しの場

活動報告

「5本の樹」計画

「5本の樹」いきもの調査

「5本の樹」いきもの調査を、専門家との協働で2008年から実施しています。全国8カ所の分譲地と本社のある新梅田シティで調査を実施し、「5本の樹」計画の効果を継続的に検証しています。生き物観察会も開催し、住民の方々より好評をいただいています。

「5本の樹」いきもの調査は、「5本の樹」計画のまちづくりの前後に、鳥や昆虫などの生息状況を実際に観察し、周辺地域との比較を行うとともに、植栽の成長に伴う生態系の経年による変化を記録・分析し、「5本の樹」計画の生物多様性の保全効果を検証することを目的としています。

全国8カ所の分譲地と本社のある新梅田シティで調査を継続的に実施しており、住宅メーカーが自社の分譲地等を対象として行うこのような生物多様性についての調査は、他に例を見ない取り組みです。

また、地域の住民が身近な環境で楽しみながら生き物と生物多様性について学ぶことができる、住民参加型の生き物観察会も一部の分譲地で実施しています。身近にいる生き物を知ることができ、お子様はもとより住民の皆様より好評をいただいています。

■ いきもの調査実施状況

調査開始	調査団地名
2008年9月～	コモンステージ松山(愛媛県松山市)
2008年9月～	コモンガーデン南吉田(愛媛県松山市)
2008年12月～	コモンフィールドみずの坂(愛知県瀬戸市)
2009年5月～	コモンシティ青葉のまち(宮城県仙台市)
2009年9月～	コモンステージひたち野(茨城県牛久市)
2009年6月～	コモンヒルズ生目心町(宮城県宮崎市)
2011年8月～	福岡アイランドシティ(福岡市)
2014年5月～	新・里山(新梅田シティ)(大阪市)
2014年5月～	スマートコモンステージみらい平(茨城県つくばみらい市)



いきもの調査実施中の様子

活動報告

「5本の樹」計画

「庭木セレクトブック」と「5本の樹・野鳥ケータイ図鑑」

樹木やその樹木に集まる鳥や蝶についての情報をスマートフォンで入手できる「5本の樹・野鳥ケータイ図鑑」サイトを公開し、普及に努めています。2015年度の年間利用件数は年間約10万1千件でした。

積水ハウスは、2001年から「里山」に学ぶ庭づくりをテーマにして「5本の樹」計画をスタート。住宅の庭先からの生態系保全活動に取り組んでいます。

「5本の樹」計画のバイブルといえる庭木図鑑「庭木セレクトブック」。樹木のみならず、花や実を求めて集まる蝶や花を紹介する庭木の資料として、2001年の発刊以来、お客様との外構の打合せの際にも使用しており、「5本の樹」計画に関心を持っていただくコンテンツとして好評です。改訂を重ねるなか、2013年からは「庭木セレクトブック」からモバイル端末を用いて見ることのできる映像コンテンツを盛り込み、リニューアル3年目となる2015年度は、昨年とほぼ変わらず、約7400冊をご利用いただきました。

また、携帯電話から樹木やその樹木に集まる鳥や蝶の情報が入手できる「5本の樹・野鳥ケータイ図鑑」サイトを開発・公開し、多くの方に身近な鳥や蝶にもっと親しんでもらい、自然保護や環境意識の向上を図っています。

本物の鳥の鳴き声と写真が確認できるため、いわば「携帯版ポケット自然観察図鑑」として利用が広がってきています。昨年2月にはスマートフォン版を公開し、さらに画像が見やすく活用しやすくなりました。2015年度は、2014年度よりも年間利用件数は約1割増え、約10万1千件となりました。

「5本の樹・野鳥ケータイ図鑑」サイトを運営

鳥や蝶、樹木の名前を知らなくても形や大きさ、色の特徴から検索可能。鳥は鳴き声を再生して確認することができます。

- 鳥24種 (鳴き声も)
- 蝶24種
- 樹木92種

を掲載



■ サイトトップページからアクセス <http://5honnoki.jp>

■ QRコードからアクセス



活動報告

「5本の樹」計画

「新・里山」と「希望の壁」

「5本の樹」計画に基づく「新・里山」は、大阪駅にほど近い「新梅田シティ」に整備され、市民やオフィスワーカーが身近な自然を感じることもできる憩いの場です。「希望の壁」とともに(公財)都市緑化機構主催第34回「緑の都市賞」内閣総理大臣賞を民間企業で初めて受賞しました。

「5本の樹」計画の実践の場「新・里山」

積水ハウス本社所在の「新梅田シティ」は、「梅田スカイビル」(40階、173m)を中心とした大阪の代表的なランドマークで注目のエリアとされています。オフィスなどが入居する連結超高層ビルは、英紙「タイムズ」に「世界を代表とするトップ20の建物」として掲載され、国内外から多くの観光客が来訪。約半数を占める外国人観光客も「新・里山」「希望の壁」を楽しまれています。

「新・里山」は、当社「5本の樹」計画の考え方にに基づき、雑木林や竹林、棚田、野菜畑、茶畑などを配し、失われつつある日本の原風景「里山」を都心部に再現した「新梅田シティ」の一角を占める自然豊かな約8000m²のエリア。原種・在来種を中心に植栽することで、地域に生息する生き物の多様性にも配慮した空間です。

2006年7月に「新・里山」がオープンして以来、多様な植物、鳥や蝶など多くの生き物を育み、身近な自然を感じることもできる場として市民やオフィスワーカーに親しまれてきました。また、田植え等のイベントを通じた地元の小学校、幼稚園等の教育の場として、オフィスワーカーの農作業ボランティア活動などにより、日常的に親しまれる地域密着型のコミュニティの場として、愛されてきました。通常、都会では見られない「ハイタカ」なども飛来します。2013年の秋には絶滅危惧種である「ミゾゴイ」が1カ月以上滞在しました。専属の造園管理会社の社員が、常駐で管理を行っています。無農薬を旨とし、自然に負荷の少ない有機栽培管理による循環型の管理に努め、生き物を育む場を創出しています。

「新・里山」と隣接した「希望の壁」は、一連のコミュニティ活動、空間管理、マネジメント等が評価され、2014年11月、公益財団法人都市緑化機構が主催する第34回「緑の都市賞」事業活動部門において、最上位賞に当たる、内閣総理大臣賞を民間企業として初めて受賞しました。



生態系ピラミッドの頂点に位置する「ハイタカ」が飛来するほど豊かな生物多様性を保持しています

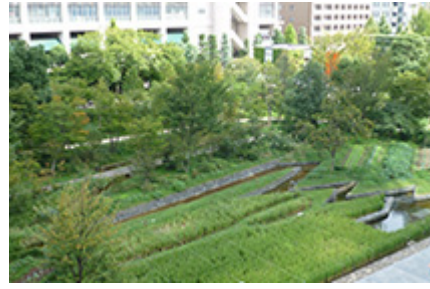


2013年10月 絶滅危惧種「ミゾゴイ」が飛来約1カ月滞在。農薬不使用によりエサとなるミズなどが豊富

「新・里山」の四季折々



春



夏



秋



冬

緑化モニュメント「希望の壁」

「希望の壁」は、建築家 安藤忠雄氏の発案により当社が建設し、2013年11月に完成しました。「新・里山」に隣接する高さ9m・長さ78m・奥行3mの巨大な緑化モニュメントです。

壁の側面は、当社「5本の樹」計画での選定樹種であるソゴ、クチナシ、ヒラドツツジ、ヤブツバキ、ヤマブキ、フジ、オオイタビなどを中心に約100種類2万本以上の多彩な植物で覆われ、開花時期の異なる草木の計画的配置により、四季に応じて変化する表情を楽しめるよう計画しています。

また、蝶を招く花木も混植することにより、「新・里山」の「バタフライ・ガーデン」ともつながる「バタフライ・ウォール」を目指し、蝶の専門家とも情報交換を行っています。



「希望の壁」と「梅田スカイビル」



受賞歴

2008年「第2回キッズデザイン賞」(「新・里山」空間を使った地元の子どもたちへの環境教育活動)

主催: 特定非営利活動法人キッズデザイン協議会

2009年「一村一品知恵の環大作戦」全国大会 銅賞受賞主催: 環境省 ストップ温暖化2010年 第7回「企業フィランソロピー大賞」特別賞

主催: 公益社団法人日本フィランソロピー協会

2010年「生物多様性保全につながる企業のみどり100選」

主催: 財団法人都市緑化機構

2013年「第7回キッズデザイン賞」受賞(「5本の樹」計画を活用した全国での自然教育活動)

主催: 特定非営利活動法人キッズデザイン協議会

2014年 第34回「緑の都市賞」内閣総理大臣賞受賞

主催: 財団法人都市緑化機構

【関連項目】

- > [公開HP>生物多様性の取り組み](#)
- > [各地で「学びの場」を提供し、展開する教育貢献活動](#)



重要なステークホルダー：サプライヤー（植木生産者・造園業者、木質建材メーカー）、お客様

進捗状況

② 合法で持続可能な木材「フェアウッド」の利用促進

活動報告

以下の基準に基づいて木材を調達しています。

■「木材調達ガイドライン」10の指針

1. 違法伐採の可能性が低い地域から産出された木材
2. 貴重な生態系が形成されている地域以外から産出された木材
3. 地域の生態系を大きく破壊する、天然林の大伐採が行われている地域以外から産出された木材
4. 絶滅が危惧されている樹種以外の木材
5. 生産・加工・輸送工程におけるCO₂排出削減に配慮した木材
6. 森林伐採に関する地域住民等との対立や不当な労働慣行を排除し、地域社会の安定に寄与する木材
7. 森林の回復速度を超えない計画的な伐採が行われている地域から産出された木材
8. 計画的な森林経営に取り組み生態系保全に寄与する国産木材
9. 自然生態系の保全や創出につながるような方法により植林された木材
10. 資源循環に貢献する木質建材

指針の合計点で調達ランクを決定

各調達指針の合計点で評価対象の木材調達レベルを高いものから順にS、A、B、Cの四つに分類。10の指針の中で特に重視している1.と4.に関しては、ボーダーラインを設定。

合計点(最大43点)	調達ランク
34点以上	S
26点以上、34点未満	A
17点以上、26点未満	B
17点未満	C

生産地経済にも配慮した「フェアウッド」導入の推進

当社は多数の木質建材サプライヤーを通じて伐採地にまで影響を与え得る責任から「アグロフォレストリ(混農林業)」等の持続可能なコミュニティ林業の育成にも配慮して、認証材の採用だけを単独の調達目標にはしていません。ただ、それでも構造材については98%、個々の内装設備まですべての建材の詳細調査によっても59%が認証材(認証過程材を含む)となっています。

「シャーウッド純国産材プレミアムモデル」が「ウッドデザイン賞」林野庁長官賞を受賞

海外各国での違法伐採が問題視される一方で、日本国内では必要な伐採が行われない山林の荒廃が問題となっています。こうした状況の改善に貢献すべく、当社は国産材の採用を進めています。2013年には、林野庁の進める「木材利用ポイント制度」と連動して、柱や梁に厳選された国産ブランド材を使用した「シャーウッド純国産材プレミアムモデル」を発売。同制度の対象期間である2015年9月までに520棟を受注しており、12月には「第1回ウッドデザイン賞」優秀賞林野庁長官賞を受賞しました。

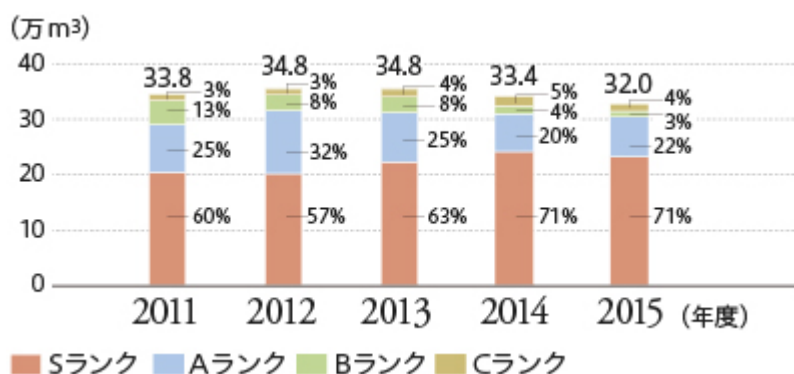


シャーウッド純国産材プレミアムモデル

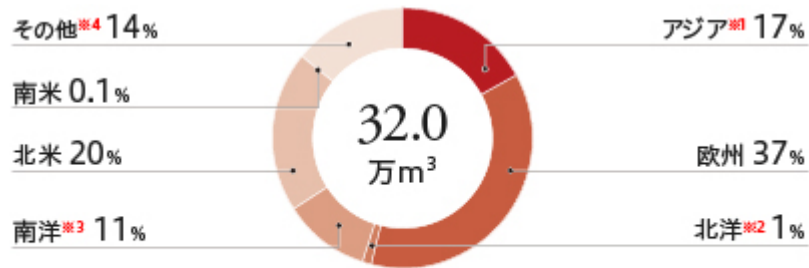
主要指標の実績(KPI)

指標	単位	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	目標	定義
「木材調達ガイドライン」SおよびAランク木材比率	%	85	89	88	91	93	95	当社による約50社の主要木質建材サプライヤーに対する実態調査

「フェアウッド」調達量とランク内訳



伐採地域別割合



※1 アジア:国産材を含む ※2 北洋:ロシアなど ※3 南洋:インドネシア、マレーシアなど ※4 その他:アフリカ、木廃材を含む

評価

2015年度は、管理目標にしているS、Aランク木材の割合は、前年度よりさらに2ポイント増えて93%となり、着実にサプライヤーごとの管理の精度が高まりつつあります。

今後の取り組み

引き続き、サプライヤーとの連携を強めながら継続していきます。また、自社の蓄積を公開するために国際環境NGOや先進事業者で組織する「フェアウッド研究部会」などでの積極的な情報発信にも努めていきます。

活動報告

フェアウッド調達

木材調達ガイドラインの運用と改定

「木材調達ガイドライン」に基づき、違法伐採の可能性や樹木の絶滅危惧リスク、伐採地からの距離、木廃材の循環利用、伐採地の社会面など多面的な視点で調達木材を評価しています。2015年度も、目標としているSランク・Aランクの比率が92%を上回りました。

フェアウッド調達（持続可能性、生物多様性に配慮した原材料調達）

私たちの暮らしや企業活動は、生物多様性の恵みに基づく資源や生態系のもたらすサービスに支えられて成り立っています。特に、大量の木質建材を利用する住宅メーカーとして、貴重な生物由来原料である木材については、持続可能性に配慮して計画伐採され、かつ、社会的にも公正な木材を原料として選択することが重要です。



一棟の住宅で使用される建材
住宅一棟で使用される部材は数万点に及びます

木材調達ガイドラインとは

海外において森林の違法伐採や過剰伐採が根絶されない一方、国内では木材自給率が上昇に転じたものの、まだ3割以下に過ぎず、伐採されずに放置されて山が荒廃するなどの問題があります。

積水ハウスは大量の木材を利用する住宅メーカーとして、これらの問題に取り組むため、合法性や生物多様性を軸に、伐採地住民の暮らしまでを視野に入れた「木材調達ガイドライン」を2007年4月に策定。約50社の主要木質建材サプライヤーに対して毎年詳細な実態調査へのご協力を頂き、必要に応じて指導やアドバイスを重ねながら、これに基づき、「フェアウッド」※調達を推進し、調達レベルの向上を図る取り組みを始めました。さらに2012年、調達に人権や労働安全の視点を加える改定を行い、現在の取り組みに至っています。

「木材調達ガイドライン」は10の調達指針で構成され、違法伐採の可能性や樹木の絶滅危惧リスク、伐採地からの距離、木廃材の循環利用、伐採地の先住民にとっての伝統的・文化的アイデンティティ、伐採地の木材に関する紛争など、多面的な視点で調達木材を評価できるようになっています。当社のこのガイドラインは、単に生物多様性への配慮だけでなく、ISO26000の要請する各国の社会的課題への配慮の視点も含む内容として構成しています。

なお、当社は、認証材の採用を単独の調達目標とはしていません。なぜなら、小規模生産者の中には認証取得のコスト負担上の理由から認証は取得しないでも、専門家の指導などを受けながら「アグロフォレストリ(混農林業)」など、持続可能なコミュニティ林業に取り組んでいる生産者もいるからです。

確かに認証材の限定は客観性が高く分かりやすい指標ですが、当社のように大手のメーカーが、納入する木質建材サプライヤーに対して認証材だけの供給を強いてしまうと、サプライヤーに納入しているこうした生産者の健全な経営のチャンスを制限し

てしまうことになるため、川下の大手メーカーの責任として、そのトレーサビリティについてのしっかりした情報捕捉を前提として、これらの採用にも努めています。

※ フェアウッド：伐採地の森林環境や地域社会に配慮した木材、木材製品のこと。
財団法人地球・人間環境フォーラムと国際環境NGO FoE Japanが提唱

積水ハウス独自の「木材調達ガイドライン」の内容

■「木材調達ガイドライン」の10の指針(2012年度改訂版)

以下の木材を積極的に調達していきます。

1. 違法伐採の可能性が低い地域から産出された木材
2. 貴重な生態系が形成されている地域以外から産出された木材
3. 地域の生態系を大きく破壊する、天然林の大伐採が行われている地域以外から産出された木材
4. 絶滅が危惧されている樹種以外の木材
5. ★ 生産・加工・輸送工程におけるCO₂排出削減に配慮した木材
6. ★ 森林伐採に関する地域住民等との対立や不当な労働慣行を排除し、地域社会の安定に寄与する木材
7. 森林の回復速度を超えない計画的な伐採が行われている地域から産出された木材
8. ★ 計画的な森林経営に取り組み生態系保全に寄与する国産木材
9. 自然生態系の保全や創出につながるような方法により植林された木材
10. ★ 資源循環に貢献する木質建材

★：2012年度に改訂した項目

(改訂の趣旨等、詳細は末尾の【[参考資料](#)】を参照ください)



■ 調達レベルの評価 ～指針の合計点で調達ランクを決定

合計点(最大43点)	調達ランク
34点以上	S
26点以上、34点未満	A
17点以上、26点未満	B
17点未満	C

各調達指針の合計点で評価対象の木材調達レベルを高いものから順にS、A、B、Cの四つに分類。

10の指針の中で特に重視している1、4に関しては、ボーダーラインを設定。

2015年度の実績

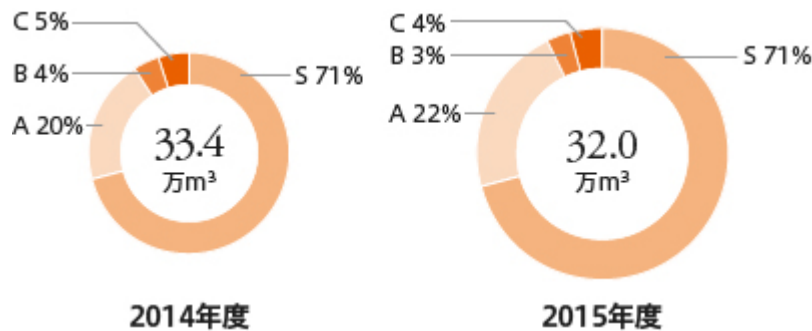
2006年度に策定し2007年度から運用を開始した「木材調達ガイドライン」も8年目となり、多くのサプライヤーがこれを参考に、自社の調達状況の改善を進めています。

2015年度は、目標としたS・Aレベルの木材調達比率95%には届かなかったものの、2014年度を上回る93%を達成し2年連続で9割を超えています。また、Aランクの木材も前年より2ポイント増加して22%となっています。

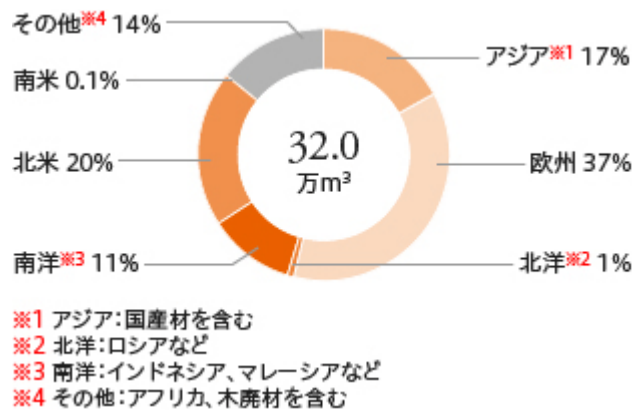
上述の通り、認証木材に限定した目標管理はあえて実施していませんが、その比率は高まりつつあり、重要な部材である「構造材」については98%が認証材（認証過程材も含む）となっています。また、当社の場合は内装設備などすべての建材・設備も含めてすべて管理しており、これら個々の設備部材まで含んだ場合は59%が認証材となっています。

特に、2015年度は議員立法による合法木材利用促進法案化の動きが活発化（2016年3月現在）する中で、違法伐採に対する大手ハウスメーカーの責任やサプライヤーへの影響力もますます拡大していくと認識しており、今後もサプライヤー各社に対してよりキメの細かい改善提案を進めることで質の向上を図っていく予定です。

取り組みの推移



伐採地域別割合



【参考】「木材調達ガイドライン(2012年改訂版)」(改訂趣旨等)

■ 調達指針⑤ … 「生産・加工・輸送工程におけるCO₂排出削減に配慮した木材」を調達します

乾燥工程の使用エネルギー

【趣旨】木材のライフサイクルCO₂の中で、乾燥工程が占める割合は非常に大きいため、(調達指針⑤の)評価項目とします。

加点	乾燥時のバイオマス利用状況
2点	通常バイオマスの実を利用しているが、時期によっては補助的に重油を使用することもあるなど、乾燥熱源の過半数以上でバイオマスなど非化石燃料を使っている。
1点	乾燥熱源の過半数以上は化石燃料だが、過半数に届かないまでも、一定量のバイオマスを使用している。もしくは、バイオマスを活用する時期がある。
-1点	バイオマスを使うこともあるが、ごくわずかで、ほとんど使っていない。もしくは、バイオマスを使っていない。／乾燥時に使っている熱源が不明

■ 調達指針⑥ … 「森林伐採に関する地域住民等との対立や不当な労働慣行を排除し、地域社会の安定に寄与する木材」を調達します

木材調達における人権擁護や不当な労働慣行の廃止、伐採地の地域社会の安定などに関する取り組み

【趣旨】木材調達のさまざまな段階で(調達指針⑥のような)社会秩序を乱すマイナス面が大きな課題としてありますが、一方で、労働者の人権擁護や不当な労働慣行を見直す動きも始まっています。また、代々受け継がれてきた森林と共生する林業や、小規模農業と組み合わせることで木が育つまでの収入を確保するアグロフォレストリー(混農林業)など、地域社会の安定を維持する取り組みも広がってきています。

加点	取り組みの内容
1点	人権や労働慣行に関する企業方針や調達指針等、明文化された文書があり、取引先含め、共有されている。
1点	人権や労働慣行に関する訴訟や通報に対応できる仕組み(組織、システムなど)を構築しており、過去10年間に重大な訴訟や通報が無いことを確認できている。
1点	コミュニティ林業やアグロフォレストリーなど、伐採地住民の主体的な森林経営に貢献する木材調達を行っている。

活動報告

フェアウッド調達

環境NGOとの協働

「木材調達ガイドライン」の運用について国際環境NGO FoE Japanと継続的に交流を重ねています。2015年度は、違法伐採対策に関する議員立法案や東南アジアの新しい木材の動きについて緊密に情報交換を行いました。

積水ハウスがこの「木材調達ガイドライン」を策定するに当たって注意したのは、自社の独善的なガイドラインに流れないように客観性を確保しつつ、作成過程の透明性を担保することです。そのために、世界の木材の生産にかかわる最新の状況を把握しつつ、各サプライヤーの抱える現実的な課題を踏まえて、国際環境NGO FoE Japanとの検討を重ねてきました。

NGOとの協働は制定だけに留まらず、実際の運用段階における検証依頼や相談、そして日常的な内容の見直しにつながっています。例えば、2011年度においても、2010年11月1日にISO（国際標準化機構）による国際規格であるISO26000の発行を受けて、木材生産地における住民の生活安定など社会性への配慮についてNGOから最新の状況説明を受け、これに基づき何回もの協議を経てガイドラインへの現実的な反映の検討を重ね、2012年度にはガイドラインを改訂しました。さらに、改訂したガイドラインに基づいて木質建材のサプライヤーへの実態調査回答内容に関しても、新しい伐採地や樹種についての評価依頼などをはじめとする多くのアドバイスをもらいました。

当社からも、温暖化防止のために木材の乾燥工程における重油の利用等についてのサプライヤーの現状を説明し、バイオ利用の加点評価の可能性について世界の先進事例についての報告を受けて議論を行う等、極めて高い運用レベルへの反映にまで踏み込んで意見交換を行っています。

「資材調達」という経営の根本にかかわる部分についても、こうした本音の意見交換ができるようになっており、企業にとっても世界標準の異なる価値観を認識して事業への反映可能性を検討する貴重な機会となっています。

近年は個々のサプライヤーから、自社においても木材調達のあり方についての改善を進めるに際しNGOを紹介してほしいという要請もあり、当社が築いたNGOとの信頼関係はサプライヤーにも波及し始めています。

また、環境や社会性にも配慮した公正な木材「フェアウッド」の浸透について、FoE Japanの協力依頼を受け、地球・環境人間フォーラムと共同で進める「フェアウッド研究部会」に参加し、企業等参加組織に対して自社の取り組みや進め方のアドバイスなどを講演しました。

また、2015年度は、環境NGOの意向も踏まえた議員立法による違法伐採対策制度検討を受け、合法伐採木材等の利用の促進に関する法律案の議論が本格化しました。こうした動きに対して情報交換を進め、当社の現状などを踏まえて、どのように対応を進めればよいかについても踏み込んだ議論を行い、準備を進めました。

活動報告

フェアウッド調達

国産材の活用

家の骨組みとなる柱・梁に厳選された国産ブランド材を使用した「シャーウッド純国産材プレミアムモデル」が、第1回「ウッドデザイン賞」優秀賞 林野庁長官賞を頂きました。

積水ハウスでは2007年に策定した独自の「木材調達ガイドライン」により、国内の森林経営の健全化や、木材輸送に起因するCO₂排出量の削減を考慮し、国産材を活用した合板の積極的な導入をはじめ、国産広葉樹の内装部材に利用するなど、国産材の活用の幅を広げてきました。

2010年より、住宅の主要構造部材にも国産材を活用すべく、お客様の好みに合わせて選べるように、木材住宅シャーウッドの構造材に秋田杉、吉野杉、土佐檜などの国産材仕様を整備してきました。

その後、林野庁が2013年4月1日に開始した「木材利用ポイント制度」に対応するモデルとして、家の骨組みとなる柱、梁に厳選された国産ブランド材を使用した「シャーウッド純国産材プレミアムモデル」を同時期に販売し「地産地消」を実現しました。単に国産材というだけでなく本物志向の銘木ブランド材を用い、また一般には採用の難しい梁についても国産2樹種から選択いただくことで、他ではできないプレミアムモデルを提案しています。

【国産材活用のポイント】

■ 全国の林産地との連携による供給安定

全国10の産地と連携し、新たなサプライチェーンの構築により、材料供給が安定化するとともに供給スピードが向上しました。また、樹種の選択肢が広がり、お客様の住まいにより近い産地で育った国産ブランド材を提供することができます。

■ 林産地と地域の集成材製造メーカーとの連携による高品質材の実現

当社を通じて市場の要求する商品性や品質管理のマインドが地域の集成材製造メーカーや生産者へと浸透することにより、ニーズに合った商品を安定して供給することが可能となりました。

■ お客様へ国産材の魅力を伝える仕組み

建築現場で国産材活用が実感できるよう、国産ブランド材の構造柱に樹種と産地を表示することにより、お客様や近隣の方、工事関係者にも国産材を身近に感じてもらえます。また、国産材について社内の勉強会を実施したり、産地見学会を行うなど知識を深めています。

◆第1回「ウッドデザイン賞」優秀賞 林野庁 長官賞を受賞

2015年12月10日、ウッドデザイン賞運営事務局(後援:林野庁)主催の第1回「ウッドデザイン賞」において、この「シャーウッド純国産材プレミアムモデル」が木を使って地域や社会を活性化しているものを対象とした「ソーシャルデザイン部門」で「優秀賞 林野庁長官賞」を受賞しました。



ウッドデザイン賞は木の良さや価値を再発見させる製品や取り組みについて、特に優れたものを消費者目線で表彰し、木材利用を促進する顕彰制度です。これによって、“木のある豊かな暮らし”が普及・発展し日々の生活や社会が彩られ、木材利用が進むことを目的としています。

■ 審査評

ハウスメーカーの取り組みとして国産材の使用が本格化しているが、これは柱と梁を100%国産材化した商品であり、消費者に対して、地域ブランド材の価値を可視化するコミュニケーションプログラムも併せ持っている点が秀逸である。地域材のブランド価値向上とユーザーの地域への思いの醸成の両立を満たしている。



日本の木の家に、
住まう。

木造社「シャークウッド」は、より良い住まいのために、水にこだわり、世界中の水を巡遊しています。現在は、主に北欧の水を使用していますが、日本の自然素材にこだわりを注ぎたい方の思いにお応えするため、積極的に高品質な国産材を使用し、故郷の森林風情をよまご国産化した「シャークウッド純国産材プレミアムモデル」の提供をスタートしました。

風には、皮質で強度の高い
国産材やカマツを使用。
とりわけ柱は、お住まいの地域に近い産地であった
地域ブランドを使用する木造を、樹種は
水松、杉、ヒノキ、秋田杉、カマツ。
地域に親じてお選びいただけます。
地元の水で建てたシャークウッド。
愛着もひとしおです。

■ 主要構造部(柱・梁)に国産材を使用

	柱	梁
国産ハイグレード	ブランド材	カマツ
国産アップグレード	ブランド材	カマツ
国産スタンダード	ブランド材	カマツ

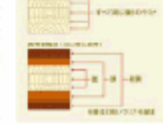
シャークウッド純国産材プレミアムモデル、誕生。



国産材をつくる
シャークウッドプレミアム構造材は、国産材
水を使用する国産材。材質・樹種などの
品質を徹底的に管理した上からシャーク
ウッドの、強さが発揮されます。正確な
測定も可能になります。国産材が
あっても、品質を誇るシャークウッド

このこだわりが、国産材で建てた家
のために、世界中の水にこだわること
、強さと品質への思い、それは国産材・地域
ブランドにも通じています。
水にこだわって国産材を大切に扱います。
国産材は、アジアの国産材の中でも、
最も安心・安全に選ばれる国産材です。
国産材は、水にこだわって国産材を大切に
扱います。また、国産材は、水にこだわって
国産材を大切に扱います。また、国産材は、
水にこだわって国産材を大切に扱います。

国産材は、水にこだわって国産材を大切に
扱います。また、国産材は、水にこだわって
国産材を大切に扱います。また、国産材は、
水にこだわって国産材を大切に扱います。



【純国産プレミアムモデル カタログ より】